

## \* いい医者を選んで 早期発見を～ \*

豊 島 美代子

わが国における死亡率の推移を死因別にみると昭和初期までに多かった肺炎、結核、胃腸炎等の感染性疾患は、戦後急速に減少し、生活習慣病(がん・心臓病・脳血管疾患など)による死亡が上位を占めるようになり、中でもがんは、昭和56年から死因の第1位を占めるようになった。平成12年には死亡数 295,399人、人口10万に対して死亡数 235.2、総死亡の30.7%となっている。

そこで4月13日、ニッセイ福井支社大ホールに本県出身で国立がんセンター下部消化器内科医長の藤井隆広医学博士を講師にお迎えして、特に大腸がんについて手遅れにならないようにするにはどうすべきか、又大腸内視鏡検査とはどういう検査で、それで治せる大腸がんはどのようなものかを中心に「内視鏡で治る大腸がんとは？」というテ

ーマで講演を開催した。

「がん」に対する関心の高さと、福井の御出身だということで大ホールは開会30分前に一杯になり、熱気溢れる中で「がん」の予防や治療のポイントを学んだ。

「大腸がんの発生要因は遺伝性でがん家系の強い人がなりやすく、食生活の欧米化により増えている。昔は牛蒡等繊維性食品を多く摂ったが、今はハンバーガーとか肉や脂肪分を多く食べるようになり大腸がんが増えた。肉食を控え野菜を多く摂り、そして運動することが予防につながる。

大腸がんが肝臓に転移したら抗がん剤も手遅れである。手術でとれる場合もあるかも知れないが医者を選ばなければならない。

本来大腸は水分を吸収する管で、がんが血管、